



新刊紹介  
追悼文  
彙報

卷頭言  
論説

研究の再構築

『史記』日者列伝と漢代「日書」の関係に関する再検討

王景創(柿沼陽平訳)

飯山 知保

1

李鴻章の丁憂と帰任再考

柏 天野

21

中華民国時期江蘇省南通県金沙鎮における農村経済の発展

——頭総廟を例として——

弁納 才一

45

翻訳論説

古代中華帝国形成期における財政の変容

マキシム・コロルコフ  
(柿沼陽平訳)

67

——前四世紀後半から前一世紀を中心に——(下)

森林之子 林光演先生訪問記録

蕭慧琴・陳淑容(弁納 才一訳)

79

訳注

『慈漢黄氏日抄分類』申明訳注その五

卷七二 申明三 第三任分司鎮江條陳轉般倉事(上)

宋代史ゼミナール

95

紀行文

金牛道広元・梓潼段沿線三国関連遺跡踏査記

柿沼陽平・王博・鮫島玄樹

139

河南省許昌市三国志関連遺跡踏査記

柿沼陽平・王博・鮫島玄樹・平林優一

163

二〇二五年朝鮮古代遺跡踏査記

韓相賢・福島理生・森田大智  
笠井雄元・小川清香・油屋凜々香

193

陝西省南部・甘肅省南部秦漢三国史跡等踏査記

加計翔成・斎藤賢  
新津健一郎・峰雪幸人

225

二〇二五年夏渤海国史跡調査紀行

王一嘯・栗林聡・盛嘉

261

——上京城址・敖東城址・六頂山墓葬・中京城址・鴻臚井の碑——

平林 優一

287

野中 敬

289

293

## 『史記』日者列伝と漢代「日書」の関係に関する再検討

王 景 創（柿沼陽平訳）

### はじめに

日者とは一般に、古代において時日の吉凶を占った技術者をさす。日者研究の材料はおもに二つあり、一つはいろいろな時日選択術を収録した出土文献の「日書」類で、目下三〇点程が発見されている。「術」レベルでは、それは戦国秦漢時代の数術史の理解を大幅に深化させるものである。もう一つは現行本『史記』日者列伝で、伝世典籍のなかで「日者」の事跡を唯一専門的にしるした文献としてたいへん貴重である。

日者列伝と出土日書をむすびつけ、漢代数術の発展にかんする新たな手がかりを明らかにすることは、ほんらい相乗効果が見込める研究アプローチである。しかし、現在の学界

においては、なお懸念点がある。理由は二つ。第一に、三國時代の張晏によれば、日者列伝は『史記』のなかでも失われた篇の一つであり、現行本は前漢元帝・成帝期の博士褚少孫による補作であつて、司馬遷の原作ではない。それゆえ、その史料の価値には疑問符が付されている。第二に、現行本日者列伝は、民間の卜者である司馬季主と二人の朝廷高官（宋忠・賈誼）との対話を軸に展開するものであり、全篇をつうじて「日者」の語は一度もあらわれておらず、むしろ終始「卜筮」について論じている。

『史記』太史公自序には、

齊・楚・秦・趙、日者を爲すに、各々俗の用いる所有り。

其の主旨を循環せんと欲し、日者列傳第六十七を作る

（齊・楚・秦・趙爲日者、各有俗所用。欲循環其大旨、

作日者列傳第六十七）。

とある。これによれば、司馬遷の原『史記』日者列伝なるものは、各国の日者術の差異の紹介がおもな内容だったはずである。ところが現行本日者列伝は、太史公自序と一致せず、すでに出土している日書のおもな内容との関連性も希薄である。これらの要因が、日者列伝の利用をさまたげており、「日書等の出土文献を研究する者が現行本日者列伝に言及し、または引用することは稀である」という状況を生んでいる。<sup>(3)</sup>

北大漢簡「日書」の公開は、かかる状況を変える手がかりとなるものと期待される。これまでの日中心の日書とは異なり、北大漢簡「日書」では非日術の割合が日術より多く、<sup>(4)</sup>多くが日者列伝所見の「卜筮」占術類型と対応しうる。では、日者の術と「卜筮」の関係はいかなるものだったのか。また後者は前者といかに融合していったのか。<sup>(5)</sup>そして日者列伝がしめすのはどの時期の日書テキストの形態なのか。本稿では北大漢簡「日書」を手がかりに、これらの問題に回答したい。

## 第一節 日者列伝における「卜筮」の類型

現行本日者列伝と出土日書との内容的関連性を確認するには、まず日者列伝における「卜筮」の範疇を闡明する必要がある。現行本日者列伝では、主人公の司馬季主がおもに「卜筮者」の職業理念と精神的追求対象について論じているが、

それとともに、「卜筮者」が必ず習得すべき占術についても少しく言及しており、以下の三史料を含む。

今、夫れ卜者は……策を分かち卦を定め、式を旋らし、棋を正し、然る後に天地の利害・事の成敗を言う。昔、先王の國家を定むるには、必ず龜策日月を先にし、而して後に乃ち敢えて代る（今夫卜者……分策定卦、旋式、正棋、然後言天地之利害・事之成敗。昔先王之定國家、必先龜策日月、而後乃敢代）。

時日を正し、乃ち後に家に入る（正時日、乃後入家）。子を産むに必ず先ず吉凶を占い、後に乃ち之を有（育）つ（産子必先占吉凶、後乃有之）<sup>(6)</sup>。

第一条は貴族階級向けの占術、第二・第三条は各社会階層に通用するものである。先行研究における争点は、これらの占術がすべて「卜者」によって司られていたのか否か、そしてそのなかに、出土日書によくみえる選択術と対応する内容が含まれているか否かである。これらの問題への解答は、現行本日者列伝が司馬遷の原作か否かを判断する重要な根拠ともみなされてきたが、この考え方自体にも再検討の余地がある。

また第一条の「卜者」は「卜筮者」の略称である。<sup>(7)</sup>余嘉錫や瀧川資言らは、「卜筮」が龜卜と蓍占のみをさすとし、「日者」を時日選択のみをさすとす。彼らは『史記』のなかに龜策列伝がある以上、日者列伝でふたたび卜者の事跡に触れているのはおかしいとし、それゆえに現行本日者列伝は司馬

遷の原作ではないとした。<sup>(8)</sup>一方、張銘洽は本文中の「卜筮」について、亀策や扚日をふくむ各占術の総称であるとしたりうえて、出土日書は秦漢時代の日者の術がたいへん複雑であることをしめしているとする。そして、現行本と出土資料が基本的に符合していることは、日者列伝が司馬遷の原作であることを裏づけるものであるとした。<sup>(9)</sup>張銘洽の「卜者」解釈は、明らかに日者列伝の文脈に合致するものであるが、初期出土日書の内容は、上記三占術とは必ずしもきれいに対応していない。

上記占術のうち、出土日書と直接対応するのは第二条と第三条である。「正時日、乃後入家」は、日書によくみえる出行選択に対応するものであり、典型的な扚日術である。「産子必先占吉凶、後乃有(育)之」(『芸文類聚』に「有」を「育」に作り、このほうが合理的<sup>(10)</sup>)は、出産後に子の将来を占い、養育するか否かを決めるもので、『漢書』藝文志数術略雑占類に分類され、出土日書によくみえる産子占に対応する。これらの占術は、当時の卜者が日者の術の使用を排斥せず、むしろ日書を日常業務の参考資料として利用していたかもしれないことを物語る。

第一条の「分策定卦、旋式、正棋」は、三種類の占卜道具をさしており、扚日術との関係は比較的薄い。第一の「分策定卦」と後文の「亀策」はいずれも狭義の卜筮である。第二の「旋式」は、司馬貞『索隱』に、

式は即ち枳なり。旋は轉なり。枳の形は圓を上にして天に象り、方を下にして地に法り、之を用うれば則ち天綱を轉じて地の辰を加う(式即枳也。旋、轉也。枳之形上圓象天、下方法地、用之則轉天綱加地之辰<sup>(11)</sup>)。

と説明されており、これが妥当である。考古学的に発見された六壬盤は典型的な枳盤であり、その使用法はまさに天盤を回転させ、天盤上の斗杓がさす地盤の方位に基づいて占卜を行うというものである。

第三の「正棋」についてはこう考える。「棋」は古代においてふつう博局遊戯用の棋子(訳者補…碁石のようなもの)をさす。『說文解字』に、

籩は局戲なり、六箸・十二棋なり(籩、局戲也、六箸・十二棋也)。

とある。博局ではふつう一二の棋子を配し、プレイヤー同士が各六個ずつもち、棋子は長方形をしている。また六本の算籌(古代では「箸」「筭」「箭」とよばれる竹木の小棒)がある。司馬貞『索隱』は、

棋は筮の状なり。正棋は、蓋しトして以て卦を作すを謂うなり(棋者、筮之状。正棋、蓋謂ト以作卦也)。

と説明しており、司馬貞は「棋」を博戯の算籌とし、おそらく本篇の「卜筮」に附会しようとしたようであるが、司馬貞説には根拠がない。六博はプレイヤー同士の遊びに用いられるだけでなく、吉凶を占うさいにも用いられ、尹湾漢墓出土

簡牘「博局占」や北大漢簡「六博」にはいずれも六博の占法が収録されている。<sup>(13)</sup>

では、出土日書には亀策・六壬式・六博局の占法が収録されているか否か。現行本日者列伝を非司馬遷原作とする劉樂賢はなおも「これまでに目睹しうる日書テキストには、亀卜や筮占によって行事の宜忌を選ぶ場面はほとんどみられない<sup>(14)</sup>」とし、択日術こそが日書のおもな内容であって、非択日術は付属材料にすぎないと強調している<sup>(15)</sup>。現行本日者列伝は全篇をつうじて「卜筮」を強調しているが、選択術に関するものはわずか一条しかなく、出土日書によくみられる内容の構造とは大きな隔りがある。さらに六壬と六博占法は亀策と同じように、初期に発見された日書テキストにはみられない。だが、もうすぐ出版される北大漢簡「日書」は、まったく新しい日書のテキストのありようをしめすものであり、出土材料と現行本日者列伝とのあいだの「不調和」を解消する新たな材料を提供している。

## 第二節 北大漢簡「日書」の新たな示唆

これまでの早期出土日書とくらべたとき、北大漢簡「日書」には二つの顕著な特徴がある。第一に、そこには択日術以外に、疾病占・産子占・耳鳴占・家妖占・筮占・式占・六博占・鐘律占・相宅・相人・祝祷などがあり、『漢書』藝文志数術

略の「雜占」「蓍龜」「形法」「五行」といった多くの部門に触れている<sup>(16)</sup>。第二に、非択日術が全篇の半分以上を占めており、(訳者補…つまり北大漢簡「日書」は「日書」として)はじめて択日術の比重を上回っている<sup>(17)</sup>。北大漢簡「日書」は、早期日書の択日ベースのテキスト形態とは根本的に異なるものであり、少なからぬ内容が早期日書未収録の占術類型である。とくに筮占・式占・六博占は、前掲日者列伝第一条の占術と対応しうるものである。以下、日者列伝の占術の順に、北大漢簡「日書」の関連箇所を紹介する。

### 二一・「分策定卦」と「日書」荊決

『北京大学藏西漢竹書』第五卷には「荊決」という題名をもつ文献が収録され、内容は失われた楚地の筮占である(訳者補…このほかに北大漢簡「日書」にも「荊決」が収録されており、これを本稿では付録本とよぶ)。北大漢簡「日書」の非択日部分にも同種の筮占が収められており、占辞の文字には少し異同がみられる。これは、狭義の卜筮がはじめて日書に登場した例である。「荊決」は、算籌をもちいて卦を立てる簡易的な筮占で、単行本の「荊決」序文には次のような占法がしるされている。

冊算を用い、分ちちて三分と爲し、其の上分は横にし、中分は縦にし、下分は横にし、四四して之を除き、盈たざる者は除く勿し(用冊算(算)、分以爲三分、其上分

衡（横）、中分从（縦）、下分衡（横）、四四而除之、不盈者勿除<sup>(18)</sup>。


この方法では、三〇本の算籌をとって無作為に上・中・下の三組にわけ、各組の算籌の数と数字の四との関係に即して処理する。以下の状況がある。

(1) 算籌の本数が四より多く、かつ四の倍数でない場合は、四で割り、余りの数によって占う。

(2) 算籌の本数が四の倍数の場合、四によって占う。

(3) 算籌の本数が四未満の場合、その算籌数によって占う。三組の算籌をこのように割算によって処理したのち、それぞれ残った算籌を「上横・中縦・下横」の原則に従って配置し、三爻の卦を構成する。この算法によって理論上、一六種類の卦象が得られる<sup>(19)</sup>。

荊決の各卦の占辞には、卦象から展開された象的記述が含まれ、そこには吉凶判断が付され、凶卦にはさらに祟をなす鬼神について付記されている。例として、吉卦と凶卦を一つずつ挙げておこう。

吉卦の例。もし上組の算籌の本数が一六本なら上爻は四、中組が一〇本なら中爻は二、下組に残った算籌の数は四本で下爻は四となり、「日書」荊決第一卦「」（四二四）を形づくる。その卦辞は、


善きかな善きかな、百事順成たらん。天の時を得て、召せずとも自ら来るなり。介介たる飛鳥、楊の枝に止まる。

美人將に來たらば、我と相い知るなり。心に中りて之を愛し、其の疵を知らず。吉（善哉善哉、百事順成。得天之時、弗召自来。介介非（飛）鳥、止楊之枝。美人將來、與我相智（知）。中心愛之、不智（知）其疵。吉）。

である。この卦が得られたら、天時に順応し、計画は円満に成就する。これは日者列伝の、

卜者、策を分かちて卦を定め、然る後に天地の利害・事の成敗を言う（卜者分策定卦、然後言天地之利害・事之成敗）。

に対応する。

凶卦の例。上組の算籌の本数が四なら上爻は四、中組が二本なら中爻は三、下組が三本なら下爻は三で、これは第四卦「」（四三三）を形づくり、その卦辞は、

皋奇、天に登らんと欲し、紛紜たること人の如く……太息すること雷の如く、道に中たりて驚く。大父、祟を爲し、犠牲を求めんと欲す。●祟は大父、不吉なり（皋椅（奇）、欲登于天、汾（紛）雲（紜）如人……大（太）息如【雷】、中道而敬（驚）。大父爲祟、欲求義（犠）生（牲）。●祟大父、不吉）。

である。この卦が出たら、おおむね出行に不利となるであろう。その背後には、祖父の祟りがあり、それを解くためには犠牲を奉る。前掲「日書」荊決の占例はまさに日者の術が「分策定卦」の役割を兼ねていたことの証拠である。

単行本と付録本の「荊決」を総合すると、狭義の卜筮が「日書」へと融合していくメカニズムが明らかにになる。単行本「荊決」の各卦には、天干または地支が冠されており、干卦八種と支卦八種にわけられる。干支による配卦は、日書のもっとも中核である時日要素と卜筮とを結びつけたものであり、整理者の李零は「ある程度、筮法の日書化を反映している」としている<sup>(20)</sup>。ただし、干支要素が荊決占法でどのような原理で運用されていたのかは未解明で、陳侃理と蔡飛舟は卦頭の干支が単なる序号機能しかもたない可能性を指摘している<sup>(21)</sup>。

これについて北大漢簡「日書」は新たな手がかりを提供している。付録本「荊決」の前章には「卜」との題名がしるされておられ、占辞には、

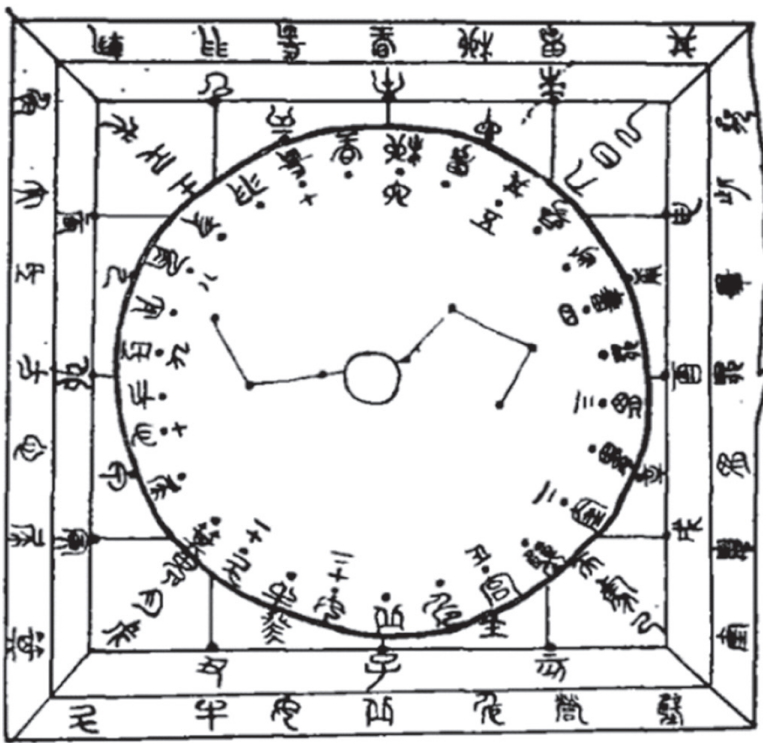
子・卯・申・酉・未を以て卜すること母かれ。卜忌日に以て卜せば、應ぜず。甲午・甲寅・乙巳を以て卜すること母かれ。行者吉あらざらん（母以子・卯・申・酉・未卜。卜忌日、以下、不讎（應）。母以甲午・甲寅・乙巳卜。行者不吉）。

とある。ここでは「卜忌日」が列挙され、もし子・卯・申・酉・未日に占えば、占辞は吉凶にかかわらず発現しないはずであり、当該占卜は意義を失う。もし甲午・甲寅・乙巳の日(22)に占えば、出行者は凶禍に会うであろう。荊決を用いて筮占する前にも、同じように上述の卜忌日を避けねばならない。これより、卜筮の日書への融合は、占法自体を改造する

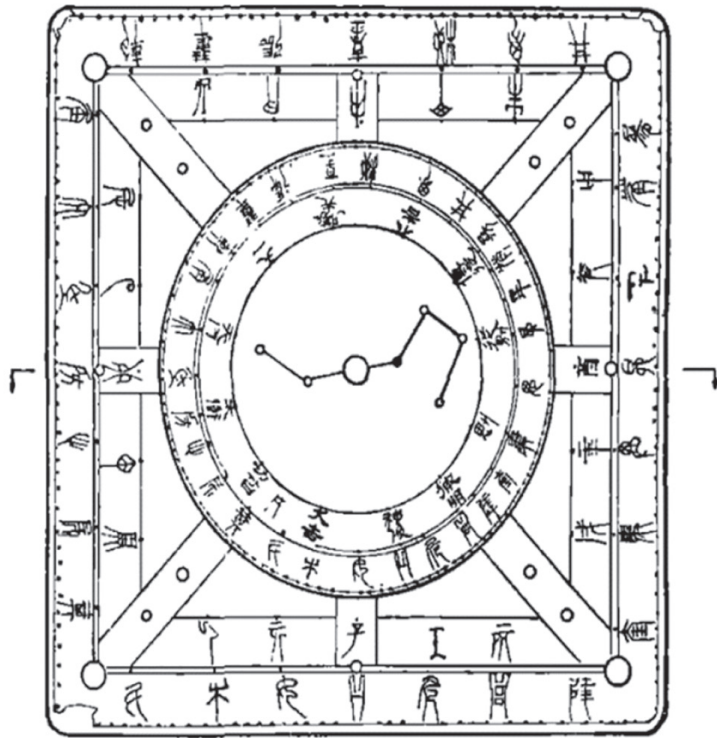
のではなく、占法とはべつに設定された、占卜を開始するタイミングによって進んだのである。

## 二二二「旋式（栻）」と「日書」式図

現存する前漢時代の六壬式盤は全部で三点確認されている。安徽省阜陽双古堆の汝陰侯漢墓M1出土式盤（図一）、甘肅省武威磨咀子漢墓M62出土式盤（図二）、于省吾旧藏漢象牙式盤（図三）である。前者二点は天盤と地盤が完全に保存



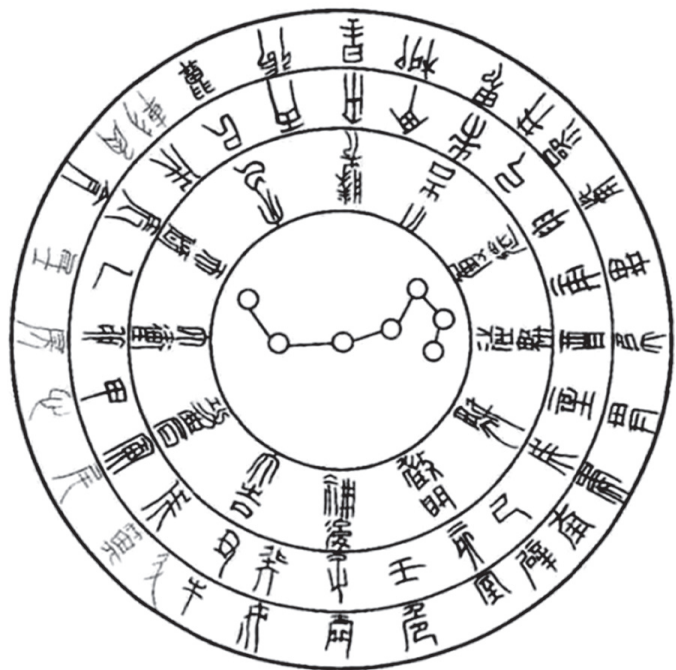
【図一】阜陽六壬式盤摹本（殷滌菲「西漢汝陰侯墓出土的占盤和天文儀器」（『考古』一九七八年）



【図二】武威六壬式盤摹本（甘肅省博物館「武威磨咀子三座漢墓發掘簡報」（『文物』一九七二年第一期）

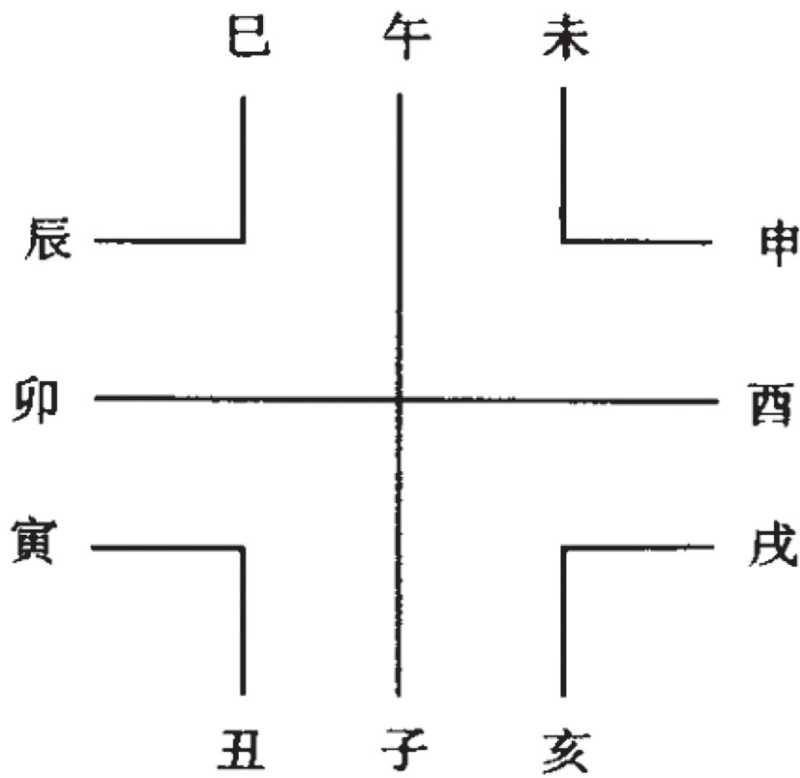
されているが、三点目は天盤のみが現存する。六壬式の天盤・地盤には、干支・星宿・月名など時空をしめす座標体系が刻まれている。

数術文献には、純粹な文字の占辞のほか、しばしばいくつかの時空の体系をしめす図像も描かれており、それは三次元立体の占盤と対応関係にあり、「二次元平面の占盤」とよびうるものである。もつとも、実物の式盤に対応する図像としては、先学によって二つの考え方が提唱されてきた。第一は、四仲・四鉤が描かれた図像であり（図四）、李零はもつ



【図三】于省吾旧藏式盤摹本（阮千慧・程少軒「双劍諺旧藏象牙杖考訂」（『出土文献研究』第二〇輯、中西書局、二〇二一年）

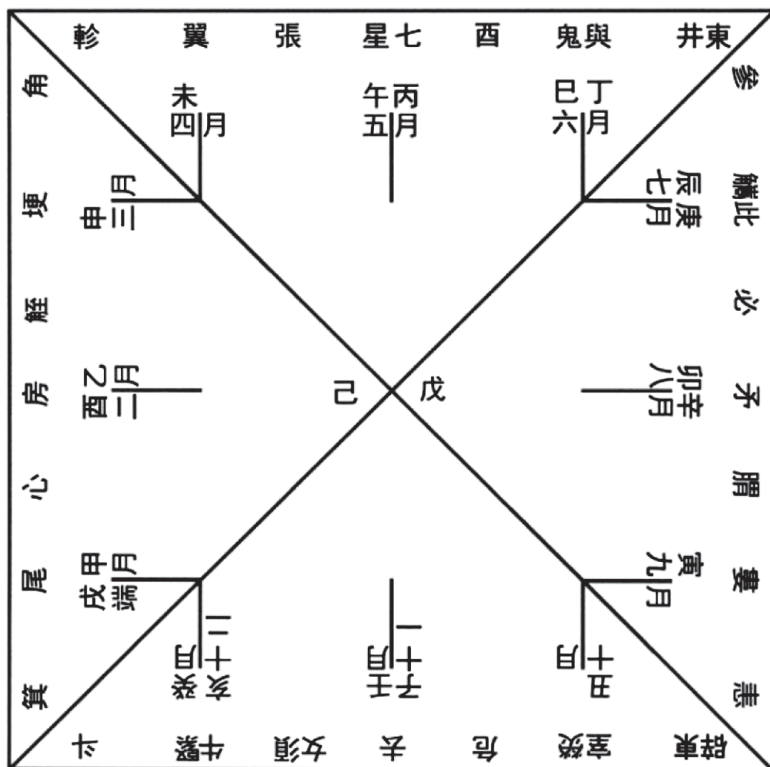
とも早くにこれを「式図」と命名している。<sup>24</sup>この説の影響力はたいへん大きい。<sup>25</sup>この図像は出土日書にもよくみられ、孔家坡漢簡や北大漢簡の「日書」ではいずれも「日廷」<sup>26</sup>という題名がもともと付されており、李零はのちにこの図像を「日廷図」と呼び直している。第二は、馬王堆漢墓帛書「陰陽五行甲篇」所収の堪輿家専用の占図である（図五）。馬王堆整理者は最初にこれを「式図」と命名したが、<sup>27</sup>『長沙馬王堆漢墓簡帛集成』修訂版は「堪輿図」と改称している。<sup>28</sup>これら二種類の占図はいずれも式盤に対応する式図とみなすべきもの



【図四】四仲・四鉤図

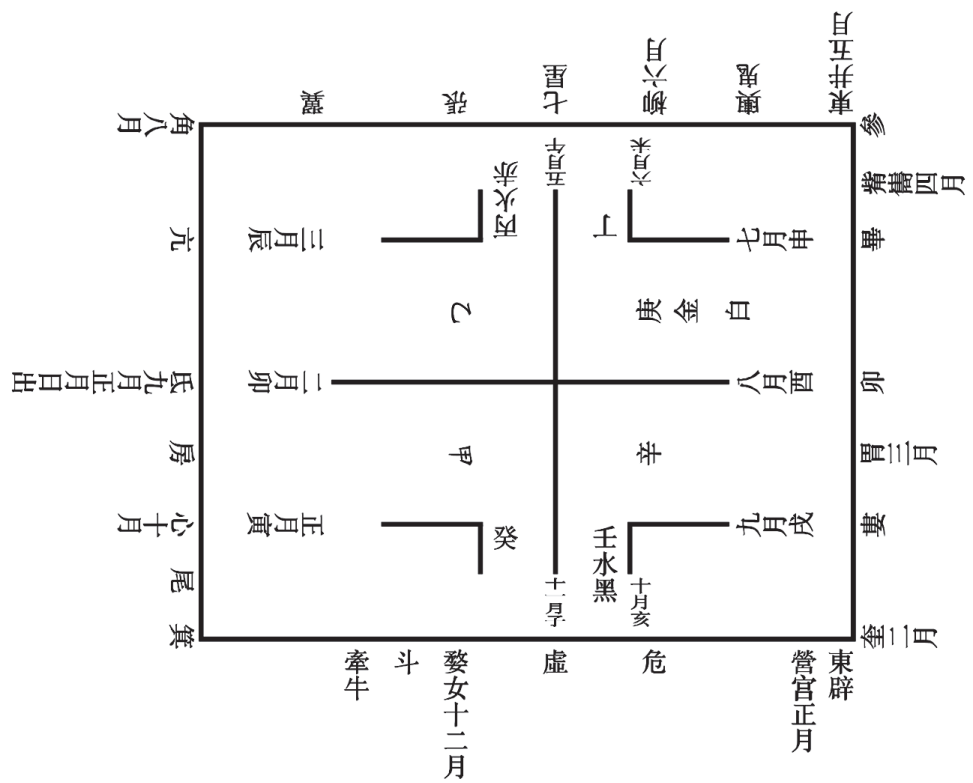
ではない。第一の占図はたいへん簡略で、式盤に不可欠な要素たる星宿が欠けている。第二の図像では月名が左周り、地支が右周りだが、阜陽出土六壬式盤では月名が右周り、地支が左周りで、方向が逆である。さらに「日廷図」と「堪輿図」にはそれぞれ実際に対応する出土物の占盤があるが、<sup>(29)</sup>いずれの占盤も上下盤の回転構造を備えていない。

北京大学所蔵漢簡「日書」には、式盤の時空構造に近い占



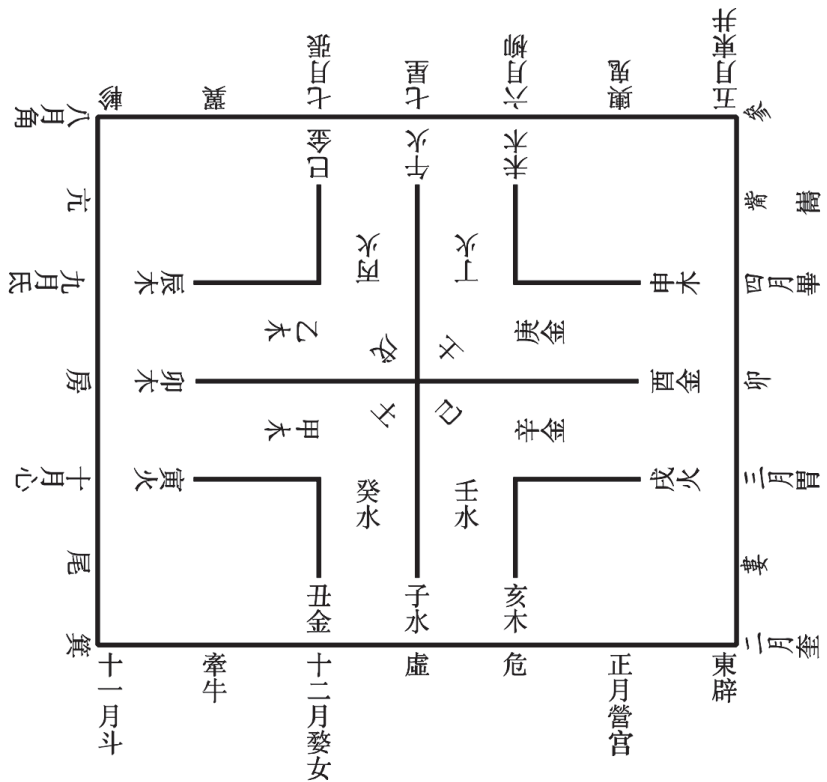
【図五】馬王堆帛書「陰陽五行甲篇」堪輿占図

図が二つ収録されており、整理小組はそれぞれをとりあえず「式図(甲)」・「式図(乙)」と命名した(図六・七)。両式図はいずれも内外二層構造をしており、内層は「日廷図」であり、十二月名と十二地支が時計回りに配されている。外層は二十八宿であり、反時計回りに十二月名が配置され、阜陽漢簡六壬式盤上の月名の方向性と一致する。かかる占図こそ、ほんとうに六壬式盤と対応する「式図」である。理由は三つ。



【図六】北大漢簡「日書・式図（甲）」

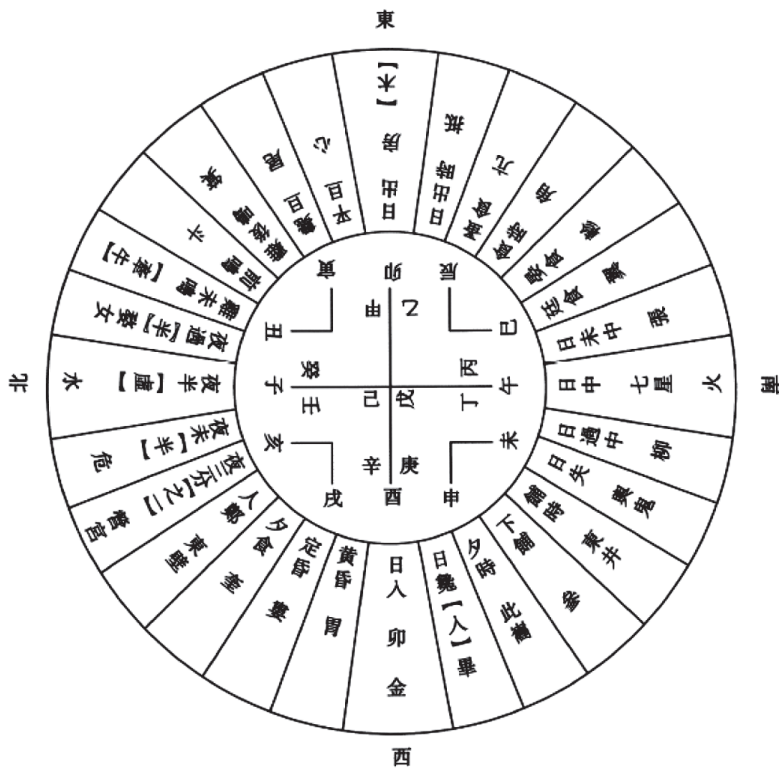
第一に、当該占図において月名が二十八宿と逆行しているのは、太陽の周年視運動軌道（古代では「日躔」と称す）をあらわしているのであり、この「日躔」の配列が六壬天盤の動きの核心原理であった。<sup>(30)</sup> 第二に、北京大学漢簡「日書」式図



【図七】北大漢簡「日書・式図（乙）」

の複合圏層構造は、于省吾旧藏天盤と似ている。第三に、周家台秦簡「二十八宿占」にも似たような占図があり（図八）、かねて式盤の初期形態だとみなされてきた。<sup>(31)</sup> 現行本日者列伝の卜者の「旋式（栻）」は、日書のなかにも対応する例を探し出せる。

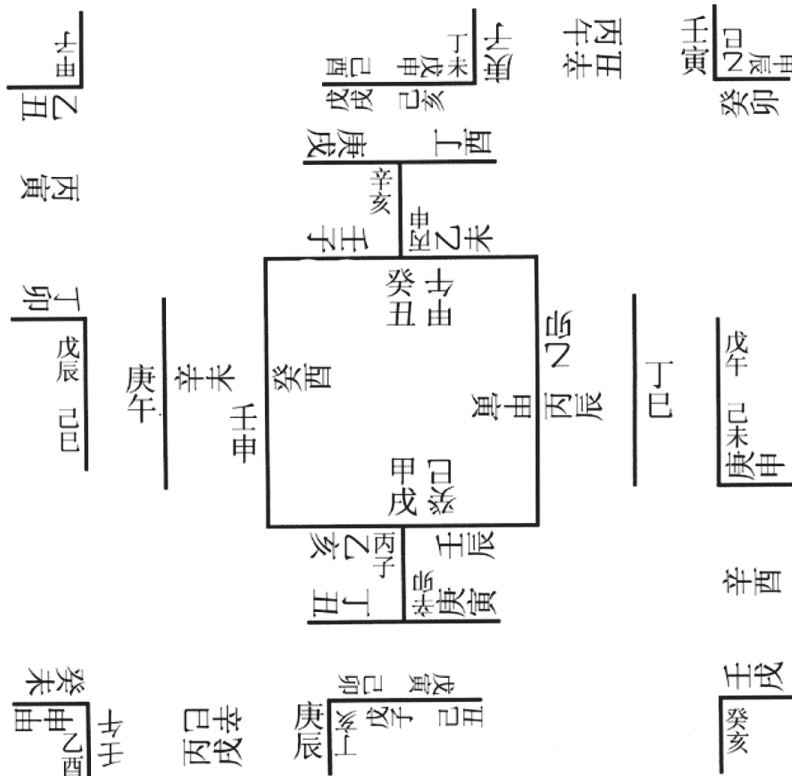
二一三．「正棋」と「日書・六博」



【図八】周家台秦簡「二十八宿占」式図

日者列伝における「正棋」とは、先述の通り、博局を用いて吉凶を占うことをさす。博局上には棋子を動かすための九本の博道が描かれており、「卜者」は棋子の位置する博道に基づいて吉凶を占う。北京大学所蔵漢簡「六博」には、棋子の位置を定める方法が説明されている。

行く、若しくは亡ぐる日を知らば、以て之を博道に案ず。知らずんば、初めて來たりて問う日を以て之を占う（知



【図九】北大漢簡「六博」六博図

行若亡日、以案之博道。不知、以初來問日占之<sup>(32)</sup>。单行本「六博」には六博図が付されており、六〇の甲子が順番に博道上に配されている(図九)。「卜者」が出行もしくは逃亡の日時を知れば、棋子のある博道の位置を確定できる。さもなくば、占問を始めた日時に対応する博道の位置を利用して占ってもよい。「問亡人」・「問行者」は单行本「六博」の、前の二つの占問事項であり、残る「問繫及會論者」・「問病者」・

「問娶婦」の三事項もまた、同様の方法を用いて博棋の位置を確定するべきものである。

六博占においては、たんに博道の位置に基づいて占うだけでなく、場合によっては、棋子の移動の方向をも参考にして、より複雑な占卜プロセスを生み出すこともある。単行本「六博」問行者条にこのタイプの占法があらわれている。当該史料の各博道を対応日時に変換し、さらに関連する占辞をしめすと以下の通り（表一）。

【表一】北大漢簡「六博」問行者条の占辞

博道の順番	博道の名称	対応する日期	占辞	吉凶
1	高	甲子・甲申・甲辰・癸未・癸卯・癸亥	留	凶
2	長	乙丑・乙酉・乙巳・壬午・壬寅・壬戌	返還未至	凶
3	曲	丙寅・丙戌・丙午・辛巳・辛丑・辛酉	中有所留	凶
4	曲	丁卯・丁亥・丁未・庚辰・庚子・庚申	憂	凶

9	8	7	6	5
過方復出	還入方中	廉	楛	道
甲寅 甲戌・甲午	癸丑 癸酉・癸巳	壬申・壬辰・壬子・乙亥・乙未・乙卯	辛未・辛卯・辛亥・丙子・丙申・丙辰	庚午・庚寅・庚戌・丁丑・丁酉・丁巳
之日	今日宜至	至	行者疾、日夜不留	至
雖未至、当近還返	吉	不過一日、行者	凶	行者未來
半吉	吉	吉	凶	凶
				喜
				吉

これより、各博道に対応する日時は、みな天干を根拠として二組に分けられ、占辞は二つの状況に分かれることがわかる。前の八つの博道（「高」～「廉」）では、それぞれの二組の日時で同じような占辞が得られる。第九の博道（「方中」）では、二組の日時の占辞は異なり、吉凶がやや異なる。「還入方中」とは、「廉」から「方中」に入ることとをさし、この

とき「方中」にあたる場合、占いによって行者が今日中に到着することを知る。たとえば癸酉日を占う場合、棋子は壬申日のある「廉」から癸酉日のある「方中」に移動して入るのであり、これが「還入方中」である。「過方復出」とは、「方中」から「廉」に出ることをさし、このとき「方中」にあたる場合、行者の帰る時期が近いものと占われる。たとえば甲戌日を占った場合、棋子はつづいて甲戌日のある「方中」から、乙亥日のある「廉」へと出ることになり、これが「過方復出」する者である。「六博」の単行本では、棋子の移動の方向を組み合わせた占法は「問行者」にのみみられ、かつ博道の「方中」に対応する日時にのみ適用されている。

単行本「六博」が占問事項を軸とするのとは異なり、北京大学漢簡「日書」所収の六博占は博道を軸とするように改められている。占法上、「日書」六博は、上記の「方中」の複雑な占法を推し広げたものであり、「高」・「長」・「楛」・「廉」・「中」という五本の博道でみな棋子の移動方向を組み合わせ、二組の日時に分けて、さらにさまざまな占問事項に基づいて、さまざまな占卜結果を得る。ここでは「高」道を例として以下のように記録してみよう(表二)。

【表二】北大漢簡「日書」六博「高」道の占辞

占問事項		行棋方向		対応する日時		占辞
事君・爲齋夫	上高	上高	癸未・癸卯・癸亥	吉	凶	婦長矣・美矣、而恐爲巫、而家毀矣
	下長	下長	甲子・甲申・甲辰	吉		
娶婦	上高	上高	癸未・癸卯・癸亥	凶	吉	又且亡、而無傷也
	下長	下長	甲子・甲申・甲辰	吉		
嫁女	上高	上高	癸未・癸卯・癸亥	凶	吉	又且亡、而無傷也
	下長	下長	甲子・甲申・甲辰	吉		
亡者	上高	上高	癸未・癸卯・癸亥	凶	吉	又且亡、而無傷也
	下長	下長	甲子・甲申・甲辰	吉		

「上高」とは、たとえば棋子が壬午日のある「長」道から癸未日のある「高」道へと上ったときの癸未日が「上高」にあたり、この日に「事君」・「爲齋夫」を問えば吉、「娶婦」・「嫁女」を問えば凶、「亡者」を問えば吉凶の間となる。「下長」とは、たとえば棋子が癸亥日のある「高」道から甲子日のある「長」道へと下ったときの甲子日が「下長」にあたり、この日に「事君」・「爲齋夫」・「亡者」を問えば凶、「嫁女」を問えば吉となる。

六博占には二種類あり、ひとつめは博道の位置によって占う簡単な占法、ふたつめは博道の位置・占問の事項・棋子を動かす方向の三つの要素を組み合わせるという複雑な占法である。目下みられる単行本「六博」はおもに前者を用いるが、

「日書」六博では両方の占法を併せ用いている。現行本「日者列伝」の「正棋」は、博局上の棋子の位置を決めねばならないだけでなく、棋子が動く方向についても考慮に入れる必要があるようであり、それによって占卜の複雑性を高めていたのかもしれない。もしそうであるならば「正棋」は、「分策」「旋杖」と似ており、占卜の操作上はたえず変動しつづけるという意味を帯びていたのである。

現行本日者列伝所載の「分策」・「旋杖」・「正棋」という三種の「卜者」の術は、いずれも北京大学漢簡「日書」のなかに対応する占術を見いだせる。だがこれは決して、現行本日者列伝が司馬遷の原文であることの証明にはならない。なぜなら、目下確認されている前漢中期以前の出土日書にはいずれも筮占・六壬占・六博占法が収録されておらず、司馬遷が日者列伝と亀策列伝を分けていることから、かれの思い描く日者の術がなお卜筮とは異なる知的カテゴリであって、かれが接した「日書」が選択術ベースの初期形態だったことが十分裏づけられるからである。

### 第三節 現行本日者列伝の

#### 成立過程に関する推測

現行本日者列伝が「卜筮者」を叙述の主軸としていることは、現行本編纂者の褚少孫が「卜筮」を「日者」の術の代わ

りとすることに明白な違和感を抱いていなかったことをしめす<sup>(33)</sup>。褚少孫は二つの要因の影響を受けていた。第一に、「日書」はまさに森羅万象を包む「占術大全」へと発展しつつあったこと。北京大学所蔵漢簡「日書」の書写年代は武帝後期〜宣帝期で、これは前漢中期以降の「日書」のありようを反映する。非選択術はもはやあってもなくてもよい「付録」ではなく、むしろ全体に占める割合は選択術を上回っていた。広義の「卜筮」概念はちょうど前漢中期以降の非選択術ベースの「日書」を表現するのに適していた<sup>(34)</sup>。劉宋・裴駟『史記集解』は、

古人は占候・卜筮もて、通じて之を「日者」と謂う（古人占候・卜筮、通謂之「日者」<sup>(35)</sup>）。

とのべており、これは中古時期の「日者」（時日を占う）と「卜筮」の境界が曖昧で、互換可能だったことを物語る<sup>(37)</sup>。

もう一つの要因は、褚少孫が司馬季主の事跡を入手した経路に関係している。日者列伝中の「褚先生曰」で褚少孫は自ら、

臣、郎爲るの時、長安中に遊觀し、卜筮の賢大夫に見ゆ（臣爲郎時、游觀長安中、見卜筮之賢大夫）。

とのべている。この経歴は、伝世文献において士大夫の宋忠と賈誼が長安の卜肆を訪れて卜者を尋ねたときの叙述とよく似ている。褚少孫の補作は、当時の人々からの聞き取りに多く依拠していた。数術関連の史実について褚少孫自身がたび

たび述べているのは、太卜官から情報を得たということである。すなわち龜策列伝では、

(郎爲るの時) 長安中を往來し、龜策列傳を求むるも得る能わず、故に太卜官に之き、掌故・文学・長老の事を習う者に問い、龜策・卜事を寫し取る(爲郎時) 往來長安中、求龜策列傳不能得、故之大卜官、問掌故・文学・長老習事者、寫取龜策・卜事<sup>(38)</sup>。

とのべている。また日者列伝では、

郎爲るの時、太卜の待詔の郎爲る者と署を同じうす(爲郎時、與太卜待詔爲郎者同署)。

とのべており、彼らから、武帝が占家を集めて某日の婚礼の吉凶を問うた故事を聞いたという<sup>(39)</sup>。褚少孫は宮中で郎となつて十余年、太卜に属する待詔の人士と頻りに交流し、彼らから聞いた数術の「故事」はおのずと「卜筮」に偏る傾向があった。そのため「卜者」は「日者」に取って代わり、褚少孫が補作した日者列伝の核心的対象となったのである。

内容的に現行本日者列伝が褚少孫補である点が確實である以上、現行本の構造上の疑問点についても解釈を加えねばならない。現行本日書列伝は四部構成で、順番に「序」(「自古受命而王」の段落)、「本伝」(「司馬季主者」)、「此務華絶根者也」(「太史公曰」・「褚先生曰」)である。このうち「褚先生曰」は、三王世家や龜策列伝のごとく(日者列伝の)本伝が褚少孫によって補作されたとは明言しておらず、「觀其(司

馬季主)對二大夫貴人之談言」というにとどまっている。また前三部は、司馬遷原筆の列伝の構造と一致し、たいへん完結しているように見える。ゆえに先学のなかには、褚少孫はたんに日者列伝に書き足しただけであり、司馬遷の伝文はそのなかに欠くことなく残されているとする者もいる<sup>(40)</sup>。

現行本日者列伝の「本伝」内容は褚少孫以前に形成され、この点は、褚少孫補作説を強く主張する論者も異議を唱えていない。なぜなら褚少孫の補作はそもそも「時に人々から聞いた話や、古書から取った記述(或聞之時人、或取之故書)」によるものだとされているからである<sup>(41)</sup>。現行本の構造上の疑問点について、清代の臧庸は、現行本日者列伝の「太史公曰」を後人がみだりに付け加えたものであるとし、余嘉錫は、『史記』を補った者がみだりから「太史公」と名乗るのは体例に則り、文辞を模倣したことのあらわれであるとす<sup>(42)</sup>。臧庸説はより合理的で、褚少孫が『史記』を補ったときの体例とも合致する。現行本『史記』において、褚少孫が補作した四篇以外に、三代世表・建元以来侯者年表・外戚世家・梁孝王世家・田叔列伝・滑稽列伝の六篇には、明らかに褚少孫が続写した内容が付記されている<sup>(43)</sup>。この六篇には、二点の注目すべきことがある。第一に、「褚先生曰」では(褚少孫が)続写した経緯が説明されており、その内容はみなその後にしるされている。第二に、褚少孫が自ら判断を下す場合<sup>(44)</sup>、多くは「褚先生曰」で始め、「太史公曰」を僭称したことはない<sup>(45)</sup>。よって

現行本日者列伝の「太史公曰」はおそらく褚少孫の手によるものではないであろう。

さてここで、褚少孫の補作四篇について考えてみると、元帝・成帝以後の人による改変の痕跡を少なからず発見できる。「今上本紀」について余嘉錫は、褚少孫の補作がつとに亡佚し、現行本が西晋・東晋の間の人物の手になることを論証した。<sup>(47)</sup> 亀策列伝では、褚少孫の補作は二つの部分に分かれており、

「褚先生曰……寫取龜策卜事、編於下方」の後にいくつかの理論的な伝文が抄録されている。続いて「宋元亡時得龜、亦殺而用之、謹連其事于左方」の後にまた宋元王の亀卜に関する事跡が抄録されている。日者列伝と同じように、現行本亀策列伝の「褚先生曰」の前にも一つの構造的に整った「本伝」と「太史公曰」があり、余嘉錫はすでにこの部分の内容が「元成以後人所補、用褚先生傳敷演成文」<sup>(48)</sup>だと論証している。

三王世家を日者列伝の構造と比べてみると、その意義はさらに大きい。三王世家の「褚先生曰」で褚少孫はみずからこうのべている。

傳中、三王世家の文辭の觀るべきを稱うれば、其の世家を求むるも終に得る能わず。竊かに長老の故事を好む者より其の封策の書を取り、其の事を編列して之を傳う……其の次序の分絶、文字の上下、簡の參差長短に至りては、皆な意有り、人、之を能く知るもの莫し。謹みて其の眞の草詔書を論次して左方に編し、覽る者をして自ず

から其の意に通じて之を解説せしむ（傳中稱三王世家文辭可觀、求其世家終不能得。竊從長老好故事者取其封策書、編列其事而傳之……至其次序分絶、文字之上下、簡之參差長短、皆有意、人莫之能知。謹論次其眞草詔書編于左方、令覽者自通其意而解説之）。<sup>(49)</sup>

褚少孫は広く三王世家を探したものの得られず、そのため漢の武帝が三王を分封した詔書をそのまま書き写した。「編于左方」とは「褚先生曰」の後に抄録することを意味するが、現行本三王世家では封策書が「褚先生曰」の前に置かれているだけでなく、さらに「太史公曰」の一段が付されている。余嘉錫は「編于左方」が対応するのが「褚先生曰」後の詔書に対する説明文であるとしているが、この説はこじつけの感がある。張大可は「褚先生曰」の文脈を推敲し、褚少孫が封策簡牘の寸法や字体に深い意味があるものと考え、ゆえに「左方」に封策文の字配りやもとの書式に従って「眞草詔書」を抄録したと指摘した。張大可によれば、かかる特殊な抄写形式は、後世の伝写過程では保持されおらず、ゆえに現行本『史記』では見ることができなくなってしまったのである。一方、「褚先生曰」以前の封策文について、張大可はまた、司馬遷の原筆であるとし、いまだ散佚していないとする。<sup>(50)</sup> 張大可説の封策文の書写形式に対する注目は高く評価すべきだが、おそらくもう一つの可能性がより大きいのではなからうか。すなわち、本来「褚先生曰」の後にあった「眞草詔書」は、

伝写の過程でオリジナルの書式を失い、前のほうに移録され、さらに「太史公曰」の段落が書き加えられたのではなからうか。

現行本三王世家の成立過程を参考にすると、現行本日者列伝の司馬季主の事跡はほんらい「褚先生曰」の後に抄録されていたものが、元帝・成帝以後の人々によって「褚先生曰」の前に書き写され、「古者卜人所以不載者、多不見于篇。及至司馬季主、余志而著之」の「太史公曰」が付加され、それによって改訂本の権威が強化された。しかし現行本日者列伝はすでに褚少孫補作のオリジナルのありようをとどめているわけではないため、かくして日者列伝のテキストの性質と編纂の年代は、長らく未解決の問題となってしまったのである。

## おわりに

現行本日者列伝と太史公自序の矛盾は、表面的には補作と原作の齟齬であるが、その背後には「卜筮」と「日者」の關係の変容が反映されている。出土戦国数術文献において、選択術と卜筮は二つの大きな主要類型だった<sup>(2)</sup>。両者は性質が異なり、伝え手も異なる。選択術は、特定の日時や方位における事柄の吉凶を事前に予測するものであり、積極的に行動の可否を選択することによって、吉におもむき、害を避けることを目的とする。一方、卜筮は既存の著龜道具を用い、発生

済の事象にもとづいて未来予測するものであり、占者は結果を受け入れるか、あるいは鬼神祭祀によって運命を書き換えようとする。卜筮祭祀にかかわる記録はおもに戦国楚墓から出土しているが、これにたいして、選択術をあつめた「日書」は、戦国～漢代に継続的に出土している。工藤元男はすでに「日書」と卜筮祭持簡のあいだに一定の継承関係があったとしている<sup>(3)</sup>。すると、北大簡「日書」所収「荊決」は、楚地の筮占が「日書」のなかに「復活」した例とみなすことができるであろう。

『漢書』藝文志数術略を参照すると、従来の出土「日書」の内容は、選択・雑占・卜筮・形法の四つに大別できる。選択術は「日書」固有の内容であり、そのことはいうまでもない。一方、ほかの三種が「日書」に取り込まれた仕方や時期はバラバラである。雑占は多くが時空的要素と結びつけられ、特定の事物が出現する干支や方位に基づいて吉凶を占うものであり、かかる占術は早期出土の「日書」のなかにすでに広くみられるものだった。北大簡「日書」の六壬占と六博占はその例であり、よってこれらが「日書」のなかに溶け込んでいったことはたいへん自然なことである。これにたいして卜筮と形法はそうしたものではなく、前者は著龜道具に基づき、後者は人物形象に基づくものであって、ともに時空的要素を必要としないので、選択術との知識的境界ははっきりしており、ゆえに早期の「日書」には卜筮や形法の内容はほとんど

みられない<sup>(5)</sup>。他方、北大簡「日書」荊決は占卜がはじまるタ  
イミングをあらかじめ設定しており、「日書」のなかにな  
り調和的に組み込まれている。北大簡「日書」所収の「相宅」  
「相人」「相卦」「畜人」の四章はいずれも形法類に属し、当  
該書籍編纂者が狭義の選択術を日書の「正統」な内容とはみ  
なしておらず、むしろかれが「占術大全」を作ろうとしてい  
たことがわかる。

現行本日者列伝所収の占術類型が選択術に限定されていな  
いことは、太史公自序における、各国日者の習俗を紹介する  
という目的からは逸脱しているが、これは同時に、褚少孫の  
補作時にすでに「日者」と各種占術が融合していたことをし  
めしている。このころには二つの変化が生じていた。すなわ  
ち、「日書」は森羅万象を包むかたちで発展しており、また「卜  
筮」は著龜・六壬・六博・選択などのさまざまな占術を包括  
する概念となっていた。当時の「卜者」にとっては、「天地  
の利害や事の成敗を言い当てる（言天地之利害、事之成敗）」  
という目的さえ達成できれば、さまざまな占術は状況に応じ  
て使い分けるものであり、すべてのものは平等にみられてい  
たのである。これらはすべて前漢中後期において術数が融合  
していく趨勢をしめすものであり、現行本日者列伝はまさに  
その時代の産物だったのである。

〔付記〕 本文は報告「如何閲読《史記・日者列伝》——北大漢

簡《日書》的新啓示——」（於早稲田大学長江流域文化研究所、  
二〇二五年七月一八日）に基づくものである。その場で柿沼  
陽平・森和・名和敏光諸氏の助言を賜った。深甚に謝する。  
本文は「古文字与中華文明傳承發展工程」プロジェクト「北  
京大学藏秦漢簡牘整理与研究」（プロジェクト番号C1404）  
の段階的成果である。

注

- (1) 『漢書』卷六二司馬遷傳（中華書局、一九六二年版。以下同じ）「太史公書……十篇缺、有録無書」。顏師古注引張晏曰「元・成之間褚先生補缺、作武帝紀・三王世家・龜策・日者傳。言辭鄙陋、非遷本意也」（二七二四・二七二五頁）。
- (2) 『史記』卷一三〇太史公自序（中華書局、二〇一四年版。以下同じ）、四〇二六頁。
- (3) 劉樂賢「从出土文獻看《史記・日者列伝》」（陳昭容主編『古文字与古代史』第一輯、中央研究院歷史語言研究所、二〇〇七年、四四六頁）。
- (4) 王景釗「北大漢簡《日書》概説」（『文物』二〇二五年第五期、七六頁）。
- (5) 一般に、『日書』には龜卜や筮占と直接関係する占術は存在しないと考えられている。劉樂賢「日書・戰國秦漢時期的選擇通書」（蔡万進・鄧文玲編『簡帛學理論与实践』第一輯、廣西師範大学出版社、二〇二一年、二七一頁）。最近公表された周家秦漢墓簡牘『日書』の「日辛」章は、理論的に卜卦と択日の関係を論じているが、具體的な占術には触れていない。
- (6) 『史記』卷二七日者列伝（三九一〇～三九一一頁）。
- (7) 本伝前文で宋忠・賈誼は「卜筮者、世俗之所賤也」とのべ、続

けて「世皆言曰「夫卜者……」とする。これより、本伝中の「卜者」と「卜筮者」は同義だと裏づけられる。

- (8) 余嘉錫『太史公亡篇考』（『余嘉錫文史論集』岳麓書社、一九九七年、六五～六六頁）、瀧川資言『史記會注考証』卷二二七日者列伝（上海古籍出版社、二〇一五年、四二一〇頁）。

- (9) 張銘治『秦代巫現象』雜談——兼談秦代「日者」——（『陝西歷史博物館館刊』第一輯、二〇〇四年）。ここでは『張銘治學術論文集』（三秦出版社、二〇一八年、一五一～一五七頁）による。

- (10) 『芸文類聚』卷七五方術部卜筮条（中華書局、一九六五年、二八五頁）。

- (11) 『史記』卷二二七日者列伝（三九一一頁）。

- (12) 李零「式与中国古代的宇宙模式」（『中国方術正考』第二章、中華書局、二〇〇六年、一三三頁）。

- (13) 連雲港市博物館等編『尹灣漢墓簡牘』（中華書局、一九九七年、二一、一二五～一二六頁）、北京大学出土文献所編『北京大学藏西漢竹書（五）』（上海古籍出版社、二〇一四年、一七九～二一二頁）。

- (14) 劉樂賢「日書——戦国秦漢時期選択通書——」（二七一頁）。

- (15) 劉樂賢『睡虎地秦簡日書研究』（天津出版社、一九九四年、四一八頁）、劉樂賢前掲論文「日書…戦国秦漢時期選択通書」（二五一頁）。

- (16) 陳侃理「北大漢簡數術類（六博）（荊決）等篇略述」（『文物』二〇一一年第六期、八七頁）。

- (17) 王景創「北大漢簡（日書）概説」（『文物』二〇二五年第五期、八二頁）。

- (18) 北京大学出土文献編『北京大学藏西漢竹書（五）』（上海古籍出版社、二〇一四年、一七二頁）。

- (19) 董珊『說北大漢簡（荊決）』（『簡帛文獻考釈論叢』上海古籍出版社、二〇一四年、二五一～二五二頁）。北大漢簡「日書」荊決は書写時の誤りによって、誤って一卦多く、合計一七卦ある。

- (20) 『北京大学藏西漢竹書（五）・荊決』「説明」（二七〇頁）。

- (21) アメリカの学者柯鶴立は、「荊決」卦首干支が八卦と類似し、「神秘的力量」を有し、占いの結果は干支が事件や人物と関わる場合のみ、吉凶を決めたとするが、具体的占法は紹介していない。

- 柯鶴立「占卜文書中的楚文化因素——清華簡（筮法）和北大簡（荊決）的比較研究」（徐少華・谷口満・羅泰主編『楚文化与長江中游早期開發國際學術研討會論文集』武漢大学出版社、二〇二一年、二三四・二三六頁）

- (22) 陳侃理「北大漢簡數術類（六博）（荊決）等篇略述」（八七頁）、蔡飛舟「北大漢簡（荊決）初探」（六二頁）。

- (23) これまでに出土した雑抄本の「日書」と比べると、北京大学藏漢簡「日書」は各章間の関係はいつそう密接である。「卜」章の前に書き写された律数による卜占の計算法則の一節は、『荊決』の次の「黄鐘」章とも関係している。

- (24) 李零「式与中国古代的宇宙模式」（『中国方術正考』第二章、一〇四～一〇五頁）。フランスの学者マーク・カリノフスキーはこれを「鉤繩圖」とよぶ。馬克「馬王堆帛書（刑徳）試探」（『華学』第一輯、中山大学出版社、一九九五年、八四～八五頁）。

- (25) 黄儒宣『日書』図像研究」（中西書局、二〇一三年）はこの説を採る。

- (26) 湖北省考古研究所・随州市考古隊編『随州孔家坡漢墓簡牘』（文物出版社、二〇〇六年、七七頁）、北京大学出土文献所「北京大学藏西漢竹書概説」（『文物』二〇一一年第六期、図版四）。

- (27) 馬王堆漢墓帛書整理小組「馬王堆帛書（式法）釈文摘要」（『文物』二〇〇〇年第七期、九三頁）。

- (28) 裘錫圭主編『長沙馬王堆漢墓簡帛集成（修訂本）』第五冊（中華書局、二〇二四年、六八頁）。

- (29) 日廷図は湖北江陵王家台秦墓M15占盤に対応し、堪輿図は江蘇

儀徵征劉集聯營漢墓M10占盤に対応し、黄儒宣は誤って旋回不可能なこの二つの占盤を式盤としている。黄儒宣『日書 図像研究』(六四～六五頁)。

(30) 張雨絲「六壬式盤天盤布局問題補議」(『出土文獻』二〇二二年第三期)。

(31) 張雨絲「六壬式盤天盤布局問題補議」(九六頁)。

(32) 『北京大学蔵西漢竹書(五)・荊決』(二一〇頁)。

(33) 劉樂賢「(史記・日者列伝)新考」(『簡帛數術文獻探論』湖北教育出版社、二〇〇二年、三六七頁)は「伝文と「褚先生曰」はともに卜筮を「日者」に含め、司馬季主を「日者」の代表とし、明らかにこの二つ場合には「日者」の概念の理解は一致している」とする。前漢中後期の「日書」の公表が少なかったため、この見解はなお深くは論証されていない。

(34) 北京大学出土文獻所「北京大学蔵西漢竹書概説」(五三頁)。

(35) 『漢書』芸文志数術略は「天文」・「曆譜」・「五行」・「著龜」・「雜占」・「形法」に大別され、所収の凶書と「日書」の選択術が相互に対応するのは「五行類」の『堪輿金匱』・『鐘律叢辰日苑』・『天一』・『泰一』・『風后孤虚』等少しだけである。これより、劉向のいた前漢中後期に、選択術は数術領域ですでに優位を占めていかなかったことがわかる。前漢中期以後に「日書」の出土が減少し、「日書」の名は中古以後に消えるのも、これと関わるかもしれない。

(36) 『史記』卷一二七日者列伝(三九〇七頁)。

(37) 『太平広記』卷二一六柳林祖条所引東晋・郭璞『洞林』「有日者柳林祖善卜筮。其妻曾病鼠瘦、積年不差、垂命。林祖遂占之、得頤之復。按卦曰「應得姓石者治之、当獲灸鼠而愈也」(中華書局、一九六一年、一六五二頁)。柳林祖は「日者」の身分でありながら「善卜筮」と称された。これも、「日者」と「卜者」が一種の汎称となっていたことを物語る。

(38) 『史記』卷二二八龜策列伝(三九二〇頁)。

(39) 『史記』卷一二七日者列伝(三九一四頁)。

(40) 劉洪生「試談(史記・日者列伝)——兼与(莊子・盜跖)篇之比較」(『諸子学刊』第五輯、上海古籍出版社、二〇一一年、三三三頁)。

(41) 余嘉錫「太史公亡篇考」(五三頁)。

(42) 清・臧庸『拜經日記』卷九(国家図書館出版社、二〇一一年、三五二頁)。

(43) 余嘉錫「太史公亡篇考」(七五～七六頁)。

(44) 余嘉錫「太史公亡篇考」(七七～九五頁)。

(45) 三代世表・外戚世家・田叔列伝・滑稽列伝。

(46) 『史記』卷九六張丞相列伝の後統部分参照(三二五四～三二五八頁)。

(47) 余嘉錫「太史公亡篇考」(二四～二九頁)。

(48) 余嘉錫「太史公亡篇考」(六六～七二頁)。

(49) 『史記』卷六〇三王世家(二五七二頁)。

(50) 余嘉錫「太史公亡篇考」(五四頁)。

(51) 張大可「(史記)残欠与補竄考辨」(『蘭州大学学报(社会科学版)』一九八二年第三期、五一頁)。

(52) 晏昌貴「巫鬼与淫祀——楚簡所見方術宗教考——」(武漢大學出版社、二〇一〇年、七四頁)。

(53) 工藤元男「从卜筮祭禱簡看「日書」的形成」(『人文論叢』特輯・郭店楚簡國際學術研討會論文集、湖北人民出版社、二〇〇〇年)。

(54) 九店楚簡「日書」と睡虎地秦簡「日書」甲種には相宅術はみられるが、相人術はない。

王景創(北京大学出土文獻与古代文明研究所館員)  
柿沼陽平(早稲田大学文学術院教授)

『史滴』論文投稿規定（雑誌掲載）

- 一. 投稿資格は早稲田大学東洋史懇話会会員に限ります。
- 二. 原稿枚数は、本論・注・地図などあわせて四〇〇字詰め原稿用紙八〇枚以内とし、和文要旨（一二〇〇字以内）、英文タイトル、英文氏名、執筆者紹介資料を添え、ご提出下さい。
- 三. 本誌は一頁二段組で、一頁あたり五四字×二三行、一二四二字（四〇〇字詰め原稿用紙三枚）として換算いたします。また、図版は一段あたり原稿用紙一.五枚として換算しております。
- 四. 原稿のご提出にあたりましては、打ち出し原稿とデータを添え、本会宛にご郵送下さい。
- 五. 提出原稿の執筆に際しては、必ず執筆要領の規定に従って下さい。同要領は請求次第、送呈いたします。
- 六. 締切期日は七月末日とします。査読委員による審査をへて掲載を決定いたします。

〈複写される方へ〉

〈複製される方へ〉

早稲田大学東洋史懇話会では、複写複製、転載複製及びAI利用に係る著作権を一般社団法人学術著作権協会に委託しています。

当該利用をご希望の方は、（社）学術著作権協会（<https://www.jaacc.org/>）が提供している許諾システムを通じてご申請下さい。

〈How to Obtain Permission〉

Waseda University Toyoshi-Konwakai authorized Japan Academic Association For Copyright Clearance (JAC) to license our reproduction rights, reuse rights and AI ML rights of copyrighted works. If you wish to obtain permissions of these rights in the countries or regions outside Japan, please refer to the homepage of JAC (<http://www.jaacc.org/en/>) and confirm appropriate organizations to request permission.

史  
滴

第  
四  
十  
七  
号

2025年12月20日印刷      2025年12月30日発行  
編集兼発行 早稲田大学東洋史懇話会  
印刷所 富士リプロ株式会社  
〒101-0048 千代田区神田司町2-14  
発行所 早稲田大学文学部アジア史コース室  
〒162-8644 新宿区戸山1-24-1  
URL <https://dpt-bun-tousi.w.wasedaa.jp/konwa/>  
E-mail: [wkonwakai@gmail.com](mailto:wkonwakai@gmail.com)